

嘗てのビルマ戦線で戦った 日本将兵を想う

— その2 —

ビルマ・ミトキーナ（ミッチーナ）で
死生を超えた友情の誓い

高松重信・著



ミトキーナ（ミッチーナ）へ進軍する日本軍



日緬ライブラリー・パダウ

PADAUK

前文 / 先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）

（一社）日本ミャンマー友好協会・副会長 高松重信

戦争とは人類が最も忌避すべき残虐な事変である。従って我々は最大限の努力をもって、その戦争を回避しなければならない。

しかしながら、世界の歴史に於いて戦火が絶えることはない。現状下に於いてはイスラエル・パレスティナ紛争、ロシア・ウクライナ戦争などと悲惨な戦いで多くの人命が失われている。また、中国と台湾、南シナ海、中近東などの地域では一触即発の危険性を孕んでいる。

プロイセンの将軍カール・フォン・クラウゼヴィッツは「戦争」を自身の著書「戦争論（Vom Kriege）」の中で次の様に定義付けている。

「戦争とは、敵を強制してわれわれの意志を遂行させるために用いられる暴力行為である」
即ち、双方が武器を有した暴力行為であるから、双方の将兵及び市民に人的損傷が必ず生ずることになる。

特に戦う将兵にとっては必ず自らの人命を投げ出す覚悟をしなければならない。つまり人間にとっては誠に苦しい状況下に於かれるから、一人一人の将兵にとっては極めて赤裸々な個人的な人間像を呈することになる。

我が国の国策により先の大戦中、遠い異国のビルマ戦線に派遣された日本将兵方々が過酷な戦いの中で、如何なる生き方を示していたかを我々日本人は知り、畏敬の念を払うと同時に、我々が今後進むべき人生観の道標にすべきと思う次第である。

他方、第二次大戦は確かに、我国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、自虐的な書物及び報道によって、第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割も、また見失ってはならない。私は、平和共存を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人が如何なる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う。

当一般社団法人日本ミャンマー友好協会は、1970年、ビルマ戦線から帰国された方々が設立した団体である。先の大戦中、ビルマには約30万人の日本将兵方々が派遣され、遠い彼の地で日本の両親兄弟及び人々の為に渾身の力を絞り勇戦されたが、戦い利にあらず、その内の約18万人の方々が戦病死され、未だその遺骨の多くは帰還されていない。我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうかと思うことしばしばである。

この意味も含めて、日本将兵方々が、あの過酷なビルマ戦線で如何に戦われたかを我々は知り、それらの人々の遺功に報じなければならないと思う次第です。

以上の観点で、（一社）日本ミャンマー友好協会の「日緬ライブラリー・パダウ」に先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）と題して、拙文を登録させて頂いた次第である。

登録させて頂いた拙文は戦記的な興味本位でなく、悲惨な戦場で戦った日本将兵の本義（人生観）と言う角度で記述致している。読者の方々に於かれては是非とも一読して頂き、些少とも御参考に為りますれば、幸甚に存じます。



ミャンマー連邦共和国



1. はじめに

「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難をともにして国家の大業は成し得られぬなり。」

…西郷隆盛

「何歳まで生きたかは重要ではない。いかに生きたかが重要だ。It's not the years in your life that count. It's the life in your years.」

…Abraham Lincoln (エイブラハム・リンカーン)

明日8月15日は75回目の終戦記念日である。我が国は大戦や大災害という悲惨で悲しい歴史を経験している。

この中で国家国民の目的を忘れず、また、人間としての価値を全うしながら、死生を超越した友情と信頼を為し遂げた人々がいた。それら人々の人物像と生きざまの航跡は、特に我々海外で活動する者達に対する道標になると思う。以下に先の大戦中ビルマ戦線に於けるミトキーナ（ミッチーナ）に於ける「誓い」の実話を紹介する。

● (1) 日本とポーランドとの友情秘話

1995年（平成7年）7月阪神淡路大震災が発生した。その年の夏休みと翌年にポーランドは被災した日本人児童計60人を同国へ招待された。費用は全てポーランドの個人、企業及び滞在先の市政府などが負担し、約3週間ポーランド各地で温かい歓待を受けた。更に、2011年（平成23年）3月発生した東日本大震災被災地の中学・高校生30名が、7月24日から8月10日まで2週間ポーランドへ招待して頂き温かい接待を受けた。

これは、ロシア革命後の混乱した中で、シベリアの地で苦境に陥っていたポーランド人の子供達765人を1920（大正9年）と1922年（大正11年）の2回にわたって日本が救出した「友情の恩返し」であった。

この孤児救済を行ったのが日赤による国際救援活動であった。しかし乍ら、日本の被災児を斯くの如く招待して頂いた日本とポーランドとの歴史秘話を知る日本人は如何ほどいるのであろうか。



日本の施設で食事を振る舞われるポーランド人孤児たち

● (2) 日本とミャンマーの感動する実話

戦争は、人類が最も忌避すべき事件であり、我々は今後二度と再び起こさないことを肝に銘じるべきである。

しかし、戦争という悲惨で、常に生命を喪失する危機に接していた先の大戦中、誠に辛酸なビルマ戦線で、バーモ県及びミトキーナ（ミッチーナ）県の両県知事であったマンダレー王族のウラテン氏と旧陸軍114連隊の八江正吉中尉との死生を超越した人間愛の真率な実話は、人をして感動せざるを得ない。今回はこの八江中尉とウラテン氏との貴重な実話を紹介する。

なお、ビルマ戦役に関して、日本はビルマ国土を荒廃させ、多くの人々に多大な犠牲を被らせている事に対して我々日本人は善処しなくてはならない。

しかし乍ら、日・緬には17世紀の半ばから「血の絆」があり、この中で多く感銘を受ける実話がある。例えば、1941年12月28日、日・緬合同でビルマ独立義勇軍を創設し両国の若者が死を超越し渾身の力を絞りミャンマー独立に貢献した物語のほか、このウラテン県知事と八江中尉のように感動する実話が日・緬には多く存在している。

2. 八江正吉中尉



八江中尉の見習士官当時の写真

八江中尉は1917（大正7年）2月長崎県諫早市長野町生まれで、1935年（昭和10年）長崎県立農学校卒業し、1938年（昭和13年）久留米騎兵第12連隊に入営、北満州警備部隊に派遣される。1940年（昭和15年）千葉県習志野騎兵学校卒業（甲種幹部候補生）し、南支那派遣の第18師団（菊兵团）騎兵隊付き見習士官となり、広東周辺に駐留し、数々の討伐戦に参加した。

第二次大戦開始と共にマレー半島に上陸しシンガポール攻略戦に参加したのち、後述するビルマ戦線に参戦し、数多くの死闘を繰り返し、遂に重傷を負ったが、仏舎利の御加護もあって九死に一生を得て、故郷に帰還した。最終位は大尉。戦後、平和産業を目指し種苗会社を起ち上げ、現在は八江農芸株式会社となり1995年にはミャンマーの事業も開始されている。諫早文化協会会長及び日・緬友好に尽くされた。

3. ビルマ・フーコンでの戦い

1943年（昭和18年）10月からインドに敗退した英・中・印軍は、再びビルマ反抗の兆候を呈していた。特に北ビルマ・フーコン地区ではスティルウェルによって練兵されアメリカ軍に支援された新編中国軍と交戦する事態となっていた。

※フーコン地区とは：ミャンマー（旧ビルマ）北部、カチン州にある渓谷であり、チンドウィン川の源となっている。



そのころ八江中尉は死の谷と呼ばれるフーコン地域の中心地であるカマインに進出していた。この地は人跡未踏な印・緬国境であり、高峰に立てば、遙か白雪を頂くヒマラヤ連邦を望み、眼下にプラマトラ河（Brahmaputra River）が遙か太古から歴史を刻む如く畝っており、遠くはインド・アッサムを睥睨（へいげい）できる正に天下の險であった。

この地で、若いが歴戦の将校である八江中尉は日夜、独立任務を与えられ、サンブラバム西方のカンダバム峠を占領するなどのほか、ハカラッカ付近で3回の陣地攻撃により敵を撃破し駐屯地のカマインに引き上げていた。このように日夜、戦闘を繰り返しながら戦果を挙げていた。

その後、中尉は重火器隊の半数と下士官兵50名で乗馬隊を編成し、ミトキーナ（ミッチーナ）にある歩兵114連隊に転属した。転属後、乗馬隊を率いて挺進将校斥候となり遠くまで行き、情報収集を行いながら敵の策動を抑えるために、度々、緬（ビルマ）・支（支那）国境付近に出撃し戦闘に従事していた。

また蠢動する中国軍（蒋介石軍）を抑えるべく地球の皴と言える山岳地帯で、文化未達の秘境である雲南を南から攻める竜兵団（第148連隊など）呼応して、ミッチーナから緬・支国境を越えて東進する菊兵団（18師団）の先頭を八江中尉率いる約

50名の集団は進んだ。中尉の隊は、カチン族の通る険しい山岳の断崖を上り、幾度か溪流を水馬で共に渡り、苦難を絶する前進をつづけた。緬支国境では陣地構築中の部隊を奇襲したり渡河中の敵を急襲撃破したりした。

営盤街では約1個連隊の敵に2時間も包囲されたが、敵数百名の損害を与え、これを山中に追い込み敗走させた。

この戦闘に於いて、市丸擲弾筒手が放った一発が敵の迫撃砲に命中し敵軍に大きな被害を与えた。戸村曹長、江口軍曹などは山頂に進出し、敗走する敵軍に機銃などの痛打を与えた。部落の石垣を防塁にして戦ったので、中尉側の損害は幸いに乗馬一頭の戦死に過ぎなかった。

八江中尉の隊は竜、菊兵団に勝る活躍をしたので、この掃討作戦後、ミッチーナーに駐屯していた18師団（菊兵団）長の田中新一中將から「君の果敢な行動は今次作戦随一のもので感状に値する」との賛辞を頂き、特に抜擢されバーモ警備隊長に任ぜられ、部下と共にその重責に就いたのである。

4. バーモの市政とウラテン県知事との出会い

バーモは東を中国の雲南省、西をイラワジ河（エーヤワディー河）に接していて、中国人の多い街であった。1271年後半にマルコポーロが後に「東方見聞録」に記録されているアジアの旅に、ミャンマーのパガンにも立ち寄っていたと記録されている。この時、中国からこのバーモの道筋を通っている。

八江中尉がバーモ警備隊長に転任した1943年（昭和18年）末頃はインパール作戦が始まる前であり戦況は一応安定していた。中尉はバーモ県民に愈々深い愛情を感じるようになっていった。1944年（昭和19年）の正月、この県民の厚意に報いようと思い、新年会を計画し、県庁や街の有力者、華僑代表などを招いたバーモ県民はウラテン県知事を先頭に色彩に富む色とりどりの民族衣装を纏った住民数百人が正月の挨拶に来た。



ウラテン氏 1965年

中尉は「本日はようこそおいで下さいました。私は本県の警備隊長の八江中尉です。ビルマ名をモンモンテインと言う若輩です。皆様方のお力添えが無いと到底この任務を果たすこと出来ないと思います。…どうか御協力を御願います。…」と挨拶をした。

続いて立ったウラテン知事は「…ビルマの神話に次の言い伝えがあります。大昔、神様が三つの卵を造られました。…一つは育ててビルマとなり、もう一つは支那となりましたが、三つ目の行方が分からなかったのです。末の弟であったビルマは幼くて弱いので、白い人間の面を被った鬼どもが来て何もかも奪ってしまいました。我々は神話にある馬に乗った救世主を待ちわびていた時、我々と寸分違わない日本人が馬に乗って助けてくれたのです。今にして思えば、行方の分からぬ卵は、遠く海を隔てた東方で、日本として強く育ち、弟を助けにきてくれたのです。…我々はお互いに仲良くしなければならぬと思います」と神妙に語って、参会者に深い感動を与えた。

ウラテン県知事は親日家として知られていた。英国の大学を卒業していたが、英国の傍若無人な植民地支配には激しい怒りを抱いていた。日本の協力を得てビルマ人による独立を勝ち取ることを常に考えており、日本軍にあらゆる協力をしていていた。英国人は、ビルマ人と応対するとき、玄関先に土下座させ絶対に家に入らなかったが、八江中尉は、自分の宿舎も開放し、誰に対しても、人間として人格を認め付き合っていた。

ウラテン氏は中尉とはよく気が合って、ついには中尉と家族付き合いになり、ウラテン氏の自宅に遊びに行くようになった。子供たちと一緒に食事も頂いた。末娘のテンテンオンも中尉になつき、その膝の上で、ビルマの歌「クワニユパンの唄」を歌い、中尉は「夕焼け小焼け」を教えたりした。

このような身近な付き合いの中で、ウラテン氏は八江中尉を「私は貴方を自分の息子だと思っているよ」と口癖に話すようになった。

八江中尉は1944年（昭和19年）の雨期前にミトキーナ（ミッチーナ）の守備隊である歩兵114連隊（丸山大佐）へ転属になった。中尉はウラテン一家と別れを惜しみつつミッチーナへ向かった



ミッチーナ道中の日本軍象部隊

5. ミッチーナー（ミトキーナ）での活動

●（1）ミッチーナーの情勢

この頃1944年（昭和44年）当初のミッチーナーの日本軍と敵軍との概情勢は次の通りであった。

1942年の日本軍のビルマ侵攻により、重慶の国民党政権への補給ルート（援蔣ルート）は遮断され、空路（ハンプ超え）を残して遮断された。ルーズベルト米大統領はこれについて、新しい陸路の援蔣ルートであるレド公路の開設は全ビルマの奪還より重要だと言明していた。

レド公路は1943年2月末にはビルマ国境にまで完成していた。その後雨期により工事は中止されたが雨期明けの1943年末にジョセフ・スティルウェル中将率いる新編中国軍が日本軍の第18師団が守備するフーコン谷に侵攻し、ミッチーナー攻略目指して前進してきた。



現在のマンダレー～ミッチーナーへの列車

他方、日本軍は補給の途切れたインパール作戦へ敵軍の物量投入による反抗によって思うように進まず、停滞をつづけるなど、ビルマ全体の戦況は逼迫し、次第に悲痛な様相を示す状況になっていた。

このような状況下で、北ビルマの要地であるミッチーナーのウキモン県知事は余り日本軍に協力的ではないので、この方面軍がビルマ政府にバーモ県知事のウラテン氏に白羽の矢を立て、ビルマ政府に要請しミッチーナーの県知事に任命することになったが、戦況が厳しくなり、鉄道も破壊され、しかもミッチーナーは最前線になっていたから、誰が考えても、そのような地域への任命を辞退するのが常識であった。命令といって引っ張ってくるわけにもいかない。戦機が容易ならぬ状況下であるか

ら、難しい自ら進んで来てくれる気持ちになってもらわねばならなかった。そこで、ミッチーナー守備隊長の丸山大佐はウラテン氏を説得できるのは親子関係にある八江中尉しかないと思い、中尉に一任した。

● (2) ウラテン氏のミッチーナー県知事への説得

八江中尉はウラテン氏説得のためにバーモに到着し、懐かしい旧部下と再会しお互いの無事を祝しあった後、ウラテン氏の宿舎を訪ね挨拶を済ますと、中尉はビルマ政府の命令と日本軍の熱望を伝え、ミッチーナーへの赴任を心中からお願いした。しかし、極めて難しい状況を察知していたウラテン氏は、全く気が進まぬ表情で難色を示しました。

中尉は「現下は非常時になりつつあります。貴方をおいてほかに、人はおらない。命がけの仕事になるかもしれない。種々の御不満や家庭的な理由はおありと思いますが、是非とも大局的な見地に立って頂き、この任務に就いて頂きたい。私が生きている間は一身をもって貴家一家の名誉と生命および財産を守ることを誓います。日本軍もミッチーナーの県民も貴方の赴任を待ちわびています。赴任の輸送や護衛も、私の方で確実に行います。」と熱意を持って必死に説き続けた。ウラテン氏は自分一人の事ではなく、家族及び従者全体の生死に及ぶ影響を受けるので、判断に三日かかった後、「私は八江さんを信じ、お言葉通りに致しましょう。私の生命が国民のために必要なら、いつでも喜んで捧げる覚悟はできている」と言って固い握手を差しのべてきた。

八江中尉は、このときほど、ありがたく感激したことは無いと自著で語っている。家族達の中には不承知の者もいたが、父に従った。ウラテン一家はこの風雲告げる情勢であったから、直ぐにミッチーナーへ出発することにした。家財道具は長男と家令が率領して、イラワジ河（エーヤワディー河）を小舟で遡行し、家族は八江中尉の案内で陸路を北上することとなった。自家用車と軍用トラックに分乗し、途中の村々で県民の歓迎に応えながらミッチーナーへむかった。

道路は虎や野象が出没する未開の密林道である。車は度々泥地にはまり動けなくなった。内田曹長（直方市）など護衛の兵士は嫌な顔一つせず、歌いながら、泥にまみれ自動車を押したり泥をかき分けたりして前進をはかった。

また、気がめいつている家族を笑わせ勇気づけた。ビルマ語を話せる中尉は小さい孫娘テンテンオンに日本の童話を聞かせたりした。ウラテン一家は兵隊たちの真面目で朗らかな協力ぶりを目にとめ、「八江さんは、こんないい部下を持って本当に幸せです。それで戦争に強いのだ」と感心して話した。悪戦苦闘をして4日目にミッ

チーナ対岸のワイモウ村に入り、翌日、ウラテン一行は無事ミッチーナーに到着し、県知事宿舎に旅装を解いた。

● (3) ミッチーナー



日本人建立の涅槃像

ミッチーナー (Myitkyina) は、ミャンマー北部のカチン州の州都である。エーヤワディー河の河畔にあり、市名はビルマ語で「大河の辺り」という意味である。東を雲南 (中国)、北はチベット、西はインドと接し、北海道の広さを有する昔も今もビルマ北部の最大都市である。当時、日本軍はミッチーナーをミトキーナと呼んでいた。ラングーン (現ヤンゴン) を起点にマンダレーを経てイラワジ河のアバの大鉄橋を渡り北上する鉄道路線の終着駅である。

イラワジ川の水運の中継地でもあり、街は河の西岸に沿って細長く、南側が商業地区、北側が官庁、弊社、住宅をなしている。ビルマ人、カチン人、中国人、シャン人、インド人、グルカ人などの多民族約一万人が住む小都市であるが、政治、経済、交通、軍事上の位置づけは極めて重要であった。

● (4) ミッチーナー戦線での八江中尉とウラテン県知事

ここを守備する日本軍は歩兵第114連隊 (指揮官：丸山房安大佐) であり、二つの飛行場、鉄道隊、糧秣弾薬集積所、野戦病院など擁する重要な作戦基地になっていた。約五千名の守備兵がいたが、1944年 (昭和19年) 4月末、主力は菊兵团作戦援護のためカマイン付近のミンジボン山系で敵の陣地を屠っていた。この留守中に敵の大部隊がミッチーナー包囲の態勢を整えていた。

八江中尉も中隊長として菊兵团作戦の支援としてミンジボン山に出撃し、敵を駆逐する中で遂に迫撃砲弾により右目を負傷し片眼が見えなくなりました。連隊命によりミッチーナーに帰還した。その後、右目瞼から破片が出てきたので、次第に回復

していった。しかし、風雲告げるミッチーナーは連日爆撃に晒され、付近に敵軍の進出もあり、いよいよ人心が動揺するようになっていった。八江中尉とウラテン知事は常に連絡し合い、必死になってミッチーナーの市政を正常に保つように苦心していた。

ミッチーナーに残っていた兵力は歩兵2個中隊と砲兵や機関銃部隊など3個小隊で、総員700人弱だった。小倉で編成された同連隊は筑豊の炭鉱出身者が多く、連合軍の猛攻に耐えうる堅固な坑道戦を展開する事が出来た。この他に通信兵・工兵・鉄道部隊・飛行場部隊・輜重・憲兵隊などが計1,430人ほどと、野戦病院の入院患者が320人ほどいた。

1944年（昭和19年）5月17日になると敵空挺部隊の本格的な降下と、同時に地上攻撃が開始された。

敵降下部隊によりミッチーナー飛行場を攻撃されてから三日後に戦闘司令部で作戦を連隊長と練っていたおり、情報班の北原上等兵が「敵が停車場付近へ進出してきた」と急報した。八江中尉は部隊長に、この敵は私に任して下さいと言って、拳銃と手榴弾を握って飛びだした。中尉は情報班の数名を引連れ、浮足立った日本軍を落ち着かせ、市街地付近で守備を固めながら敵情を偵察すると、敵は安易に進出してきたから全く油断していた。

戦いは食うか食われるかだ、機先を制する者が主導権を握る。中尉は敵を引きつけ急襲射撃を浴びせた。不意を突かれた敵はバタバタ倒れ、狼狽しだし十数人の死体を残し四散した。中尉は部下に命じて、敵兵が徘徊する中をかいくぐり、一気に停車場まで突進し、爆撃跡の大きな穴に駆け込んだ。前後には敵が右往左往していた。中尉は周囲の情勢から奇策を思いついた。この兵力差では、まともに戦うと到底勝ち目はない。幸い大穴付近は2メートルの雑草で覆われ敵からは発見出来難い状態であった。そこで同士討ちをやらせようと考え、中尉達は穴から這い出し敵から奪った自動小銃で全面の敵に掃射を浴びせた。不意をくらった敵はなす術もなく屍を重ねて倒れた。

中尉達は穴に引き返し、周囲に向かって乱射すると、敵は我々を発見せず、前後の敵が同士討ちをしだした。中尉は更に同士討ちを助長するために部下に命じて前後を撃ちまくって一層混乱を巻き起こした。この戦闘を続けている間に、急を知り駆けつけた日本軍が包囲体制を整え、敵を攻撃したので、狼狽した敵は、遺棄死体671名と多くの兵器弾薬を捨てて蜘蛛の子を散らす如く退却した。日本軍には一人の損傷もなく、奇計は見事に的中した。装備の悪い日本軍はこの戦闘で得た兵器弾薬で再武装した。不意の攻撃により壊滅の危機にあったミッチーナー守備隊は貴重な時

間を稼ぎ得たのである。また、士気も大いにあがったのである。

ウラテン一行の安否を心配していた中尉はこの戦闘後直ぐに、知事の住まいを訪ねた。ウラテン一家は危険を感じたので他の知人宅に避難していた。中尉がその家に行くと、高床の階段を駆け降りてきたウラテン知事は、中尉に抱き着いてきた。「八江さん大丈夫ですか」「大丈夫です」と、後は声が詰まって涙になってしまった。

「危険が迫っていますから貴方及び御一家の方々は、直ぐに日本軍のところに来て協力して下さい」と言った。

ウラテン知事は「私は自分のとるべき処置に迷っています」「女子供と従者を多く連れて、日本軍のところに行く、戦闘の邪魔になりはしないかと心配していました。今貴方が只一人、命がけで救いに来てくださった顔を見たおり、決心しました。「八江さんと一緒なら死んでも良いと」言って日本軍の駐屯地に行くことにした。

● (5) ミッチーナーの人々の人心確保

ミッチーナーは突然戦場となり、爆撃の度もまし、日本軍は数倍の敵を相手に連日激戦を交え、刻一刻、敵に押し込まれつつあり疲労の色を呈するようになっていた。このような情勢下でミッチーナーの人々の人心も動揺するようになりその確保が必要になっていた。

そこで、市政を任されていた八江中尉はウラテン知事とウバイセン裁判長と共にミッチーナー市民への布告文と役人や警官及び市民防衛隊を招集するための文章を起



寺院をパトロールする日本兵

草した。市の職員が多数集まり緊張した中で、中尉は知事を横において次のことを伝えた。

「ミッチーナーは突然激しい戦いになりました。この街が戦場になったことは申し訳ない。貴方方にも生命の危険がせまっています。日本軍はこの街を死守し、貴方方の安全を図る決意です。…心ある人は、日本側に来て協力して下さい。昨日の私共の戦果を見てまわり、決心がついたら我々に協力して下さいなどと心を込めて話した。」

彼らは戦果を見回り、またウラテン県知事の人柄も信頼し、間もなく家族がらみで日本軍側にやってきた。市内に残っていた相当数の市民に対して、彼らに被害が及ばないように、市民病院に赤十字マークを大きく印した屋根の付近に集結を指示した。若い日本語学校の生徒を中心にした市民防衛隊は市民の世話や、防空壕掘り、市街地整理、防火などに良く協力してくれた。知事の次男ココエさんは通訳として良く協力してくれました。

● (6) ミチナでの活躍

八江中尉は守備隊長の丸山大佐から新任を受けウラテン知事と市政に尽くすとともに、侵入してくる敵軍とも戦った。このように何時も危険な戦いに身を投じている中尉にウラテン氏及び彼の家族は無理をしないで下さいと声をかけていた。

あるとき、中尉は南太平洋のガダルカナルで日本軍と死闘を演じた米軍メリル准将が率いるジャングルの精鋭部隊とも激しく戦った。戦い慣れをした中尉の少数部隊は地の利を得て自軍の位置を敵に悟らせなく有効な攻撃を行い、敵をなぎ倒すなど、勇敢で且つ合理的な戦いにより退却させた。

しかし、このミッチーナーで敵との戦いで兵員、武器が劣っており損害も生じる事態になり、徐々に苦戦になりつつあった。そのとき守備隊は思いもよらない情報を受電で入手した。ミッチーナー北方の各地に派遣されていた部隊が帰還できず、サンブラバム街道12マイルにある地に集結していた。兵数約400名、野戦病院の分院も交じっており、患者以外は無傷の精鋭であった。この精鋭400名を、いま、守備隊へ何としても迎え入れる必要が生じた。そこで丸山連隊長は部隊本部情報班長の八江中尉を呼んでこの任務を命じた。

この時、平井副官（兵庫県姫路市出身の薬剤師）が部隊長に次のことを懇願した。

「連隊長殿、この任務だけは、八江中尉にやらせないで下さい。危ない仕事は今迄もみんな八江君にやらせています。この人は生き残っていらわんとこれからが困るのです」といった。ビルマ語に精通し、現地事情も詳しく、且つ戦闘能力も優れている。彼はミッチーナー守備隊にきてからも最も顕著な働きぶりを示し、特に駅付近に進出してきた敵を情報班などの少数を率いて、奇策を用いて、敵の虚を

つき遺棄死体500を数える戦果をあげ、多量な兵器や糧秣を得ている。その他の戦闘でも戦果を挙げているから、副官は中尉を残したかったのである。しかし乍ら結局、八江中尉が平井副官を説得して精鋭400名を迎えに行くことになった。中尉は情報班から村山軍曹、藤波上等兵、憲兵隊から中国語ができる藤田軍曹と反英の闘志である現地人のタキンネッペ青年を道案内に選んだ。

● (7) 決死行と仏舎利の供与

八江中尉はこの任務が決まったのち、生還が期せられないこともあって、ウラテン県知事には、それとなく別れの挨拶に行った。そうすると、長身瘦躯、50歳を超えている温和な風貌のウラテン県知事は中尉に次のことを話した。

「…貴方は、いつも実に危ない仕事ばかりさせられている。私がミッチーナーの県知事を引き受けたのは、貴方の人間の誠実さに殉じる気持ちからです。私は日本軍がきてから、牟田口司令官など高官も含めた数多くの人々と交わってきました。彼らが大東亜戦争の意義を説いたりして、種々の考えを話された。しかし、全幅の賛意を表せませんでした。我々ビルマ人が望むのは、本当の独立であって、日本軍に幾ばくかの違和感を抱かざるをえなかったからです。この頃のビルマ人の心は日本軍から離れつつあります。しかし、私の貴方に対する気持ちは日ごとに強くなるのです。貴方ほどビルマの事を考えてくれる人はいなかったからです。…私の目の前から消えないで下さい…」と言ってしきりに落涙した。誠に驚くべく信義に厚い人であった。

ウラテン氏は、今回、中尉が命じられた任務の中止を説くのであるが、それが最早不可能と知ると一家の重宝である釈迦の仏舎利を八江中尉の守り神として贈ってくれ、次の話をした。

「…私の家は昔のビルマ王族であり、私はその長男です。…私の祖先は大軍を率いてインドと戦い大勝を得た。そのときインド王国から仏舎利と釈迦の遺髪を送られています…仏舎利は代々我家の秘宝として大切に保管しています。貴方は私の息子です。貴方の生死は、私たち家族の存廃にかかわる大事です。貴方も熱心な仏教徒ですから、私は仏舎利の一つを貴方にお守りとして差し上げたいと思います。必ず



仏舎利が縫われた軍帽

危難を免れると思います。」と話した。

ウラテンは次女のテンキキに言って、象牙の箱にある仏舎利の一つを取り出させ、それを八江中尉の軍帽の中に縫い付けさせたのである。

1944年（昭和19年）7月17日、八江中尉一行は雨降る中、敵の囲みを衝いて出発した。敵の歩哨線を匍匐（ほふく）などして、中尉一行はようやくサンブラム街道沿いの密林内に集結していた部隊を見つけることができた。

約400名の日本兵は、伊熊中尉、伊藤少尉、麻生軍医などが指揮をとり、八江中尉を隊長として先頭に立ちミッチーナの日本軍陣地へ向かった。日本軍の無線電話は敵側にも盗聴されていると中尉は察していたが、敵はこの退避行を既に受信しており、巧みに待ち伏せをしていた。

ミッチーナ陣地にあと一步の湿地帯に差し掛かった。50センチほどの水深さがあったので、我々は草を掴んで水中を滑るようにして前進していた。先頭の兵が敵弾に撃たれた。中尉の凶囊がもぎ取られるようにひっくり返った。次の瞬間中尉は腰を鉄棒で打たれるような衝撃を受け下半身が全く効かなくなり、鮮血が水を染めた。他に3、4名の兵も撃たれたらしい。こんなところで無駄死にはできない。生ぬるい血が肌を伝わってポタポタ落ちた。軍刀を杖にして左足で歩き出した。藤波上等兵が心配して肩を貸してくれた。敵は何故かそれ以上撃たなかった。村山軍曹の助けをかり台地の上へ引き揚げてくれて軍医が応急手当をしてくれた。

八江中尉は、敵がほっておくわけがないと思い、負傷も顧みず伊熊中尉を呼び半径100メートルの半円形陣地を掘らせた。案の定、敵は偵察機からの情報を得て砲撃を加えてきた。数名の死傷者をだしたが持ちこたえ、攻撃が終わった後、隊の編成を解き、暗くなってから数人ずつの集団を組んで基地に戻るよう指示した。

八江中尉は歩けなくなったので、その場で自決するつもりであったが、村山軍曹が「隊長殿の任務は、まだ終わっておらんのですよ。勝手に自決されては残る者が迷惑です」といって通信隊2名の兵とともに中尉を交互に背負って陣地に戻ったのである。

当日は豪雨であったので、敵もそれに参って警備をおろそかにしたという幸運にも恵まれて多くの兵が陣地にたどり着いた。中尉は他の負傷者とともに手当てを受けていた。既にミッチーナ市街地の1/3は敵の手中になっていたため病院と言っても廃墟の建物の土間であった。守備隊の約半数は戦傷死していたので、中尉は病院に一時いたが、情報班に戻り、防空壕の中で衛生兵の手当てを受けながら指示をしていた。

噂を聞いたウラテン県知事は急いで見舞いに駆けつけてくれた。家族全員で心をこめて作った料理を八江中尉にすすめ、その生還を喜ぶと共に、仏舎利を縫い付けた

軍帽を何度も礼拝した。

中尉はウラテン氏に仏舎利の御加護で生還できたことの礼を繰り返して述べた。しかし、中尉はミッチーナーの大勢が決まっている現在、ウラテン一家をどうすれば良いかと悩み悩んでいた。負傷し介助が必要な自分であることが情けなかったのである。こうしているうちに数日が過ぎた。中尉は情報室で身を横たえながら、部下たちに指示を与えた。この苦戦中にもかかわらず彼らは実に良く任務を果たしている。中尉は歩行出来なかったが、ミッチーナー内部の混乱と動揺を可能な限り抑え、敵の動向を探り、守備をまっとうしなければならなかった。



突撃体制の日本兵

もう一つの重要な役割はウラテン一行の安全も確保しなければならないので、日に一度は有能で反英団体タキン党の闘志であるタキンネツペをウラテン家へ様子と要望事項が無いかなどの連絡に向かわせた。

敵軍の圧倒的な兵力と物量、即ち、敵5個師団、一個旅団と有力な空軍及び砲兵による大軍団に対し、日本軍は後に追加兵力も加えても僅か4,000名くらいで殆ど弾薬・食料の補給もなく10万人以上の敵兵と航空機及び重火器と80日以上戦ったが、結局ミッチーナーから退却せざるを得なかった。戦いの詳細は省略するが、双方の被害を次に列記する。

日本軍の損傷		敵軍の損傷	
戦死	790人	米軍戦死	272名
負傷	1,180人	米軍傷病	1,935名
捕虜	167人	中国軍戦死	972名
		中国軍傷病	3,372名

●（８）ミッチーナ―退却に当たっての秘話

このミッチーナ―からの撤退に関して、有名な辻参謀（戦後、参議議員）は守備隊長の丸山大佐と意見が合わず、どうも嫌がらせ半分に村上少将を僅かな兵を付け送り込んだと言われている。指揮権は丸山大佐に委ねられていたから、軍の指揮系統に混乱を来した。古武士的で教養のある村上少将は作戦に対して一切口を出さず、ミッチーナ―退却の責任をとって自刃するのである。尊敬している村上少将の部下は少将の指の骨を分けて持ち帰ったと言われている。

この種の人事はやってはならない教訓として我々は肝に命じなければならないと思う。

守備隊長であった丸山大佐は退却の非難をされるが1945年（昭和20年）7月日本軍の第28軍がシタン川を超え退却するにあたり、英軍にその橋頭保を先に押さえられると袋のネズミなる公算が強かったが、戦略的に重要と判断した丸山大佐が、英軍より先にその橋頭保を押させていたので、日本軍はモーラミャン又はタイ国の方へ退避できたのである。丸山大佐はこれにより名誉挽回している。

7. ミッチーナ―からの退避行

●（１）ウラテン氏との別れ

ミッチーナ―退却に関して重傷者は筏でイラワジ河を下りバーモで救出される手配になっていた。重傷者の内八江中尉のみは担架に乗せられ退却した。これは中尉がミッチーナ―～バーモ間の兵站地理について最も詳しいためでもあった。

ウラテン一家はこの八江中尉の担架の後に続いた。女子・子供と使用人を含めた大人数であり、退却する日本軍と道なき道である山岳地帯を走破しなければならない。中尉は気が気でなく、短い休憩時間毎にウラテン一家を慰め、末娘で6歳のテンテンオンの手を握ったり、部下に頼んで、おぶってもらった。

部隊がナンタロ河の渡河地点から約半数が無事対岸に渡ったおり、照明弾があがり、かなりの敵から機銃掃射を受けた。そこで残りの半数は、さらに上流に渡河地点を求めるより他に方法が無くなった。退却となると気力が衰えてくる。残る部隊の指揮を水上部隊の水淵少佐が取ることになった。中尉が所属している第114連隊と水上少将との軋轢があって、何と無しに感情の纏れもあった。

水淵少佐は八江中尉を呼び、こう言った。「八江中尉、君の連れている現地人を部隊から切り離してくれ、退行の邪魔になる」と…。一応相談ではあるが、冷たく厳しい言い方であった。八江中尉は早く渡河地点を探さねばならず、時間的余裕もなか

ったので、少佐に次のように話した。「ウラテン知事は現地人にはありますが、ビルマの王族であり、常に親日の県知事として、死生を超えて働いてくれています。軍司令部からも庇護を頼まれていますから、ここで彼らを見放すことは日本軍として出来ないはずですよ」自分が部隊の迷惑にかからないようにするとも言ったが、中尉が担架搬送の身分であることもあってか、頑として聞き入れられず、「部隊から切り離せ」との一点張りであった。

八江中尉は仕方なく、ウラテン知事のところに戻り、辛かったが、事実をありのままに話した。涙が頬を伝ったが止めることができなかった。

ウラテン氏は「いいのですよ。八江さん。私たちは私達で行動します。実は、この大家族が日本軍に御迷惑をかけてはいけないと思い、いま家族と相談していました」と…。

相手の気持ちを酌量するミャンマー人の代表的なウラテン氏は続けて、「私たちは船を探してイラワジを下るから、心配しないで下さい」と言った。

中尉は「私の体がこのような状態であり、貴方方をお守りすることができません。優秀なタキンネッペ君を案内に就けますから、頼りにしてください。約束を守れず、誠に申し訳ありません。どうか許して下さい」と…。

中尉は沈痛の思い出話した。ウラテン氏は八江中尉の手を握り次のように言った。

「…また、会える日を仏に祈りましょう。…ビルマの独立の日が来ることを期待します。八江さんが、私たちに尽くして下さいた御親切を生涯忘れは致しません。名残惜しいですが、お別れいたしましょう」と言った。

ウラテン氏の婦人、長男のココミン、次男のココエなど皆はビルマ風に合唱して八江中尉を拝み「八江さん、死ぬときは一緒と言ったのではありませんか、一緒に、どうか連れて行ってくれませんか」と口々に言った。

しかし、軍隊の指揮命令下にあっては離別をするほか道はなかった。このような中でウラテン氏は「一つだけ頼みがあります。メイミョウに年老いた両親と妹がいます。もし、貴方が先にメイミョウに到着されれば、父母に心配しないで下さいと伝えて下さい。私たちはバーモからメイミョウに向け退行していく予定です」と言った。

ウラテン一家は部隊が出発するのを白いハンカチを振って見送ってくれた。八江中尉は担架の中で嗚咽を必死にこらえたと自著で記述している。

● (2) 八江中尉の身代わりとなった仏舎利

ウラテン一行と双方が涙の中で別れたが、結果はそのほうがよかった。八江中尉一行はその後、一路バーモーへ向かった。ナンタロ河の上流で渡河ができたが、まもなく森林の中から敵の激しい銃撃を何回となく受けた。このような退行では子供や老人を引き連れた民間人がとても同行できるような状況ではなかった。敵の攻撃とその都度の応戦はその後もつづき、徐々に部隊は応戦すると言うより敗走するに至った。このようになると勇敢な114連隊（菊部隊）の兵士も驚くほど弱体化してしまった。



ビジャングルを行く日本兵

再び、ジャングルから敵の射撃をうけた。ついに担架を担いでいたビルマ人たちも、担架を放り出して逃げてしまった。八江中尉は闇の中に投げ出された。中尉は最早、独力で危機を乗り切るより他に道がなかった。万が一のために持ってこさせていた松葉杖を見つけ、渾身の力をふり絞り立ち上がると、不思議なことに立てたので、一步一步杖を頼りに歩いた。負傷していた右腰（大腿部の付近）に殆ど痛みを感じなかった。この奇跡は仏舎利の御加護と中尉は胸が一杯になったと述懐している。そうしている内に、人影が近づいてきた。敵ではなさそうであった。

「あ、八江隊長ですか。立ってあるかかれて大丈夫ですか」と声をかけてきた。声の主は村山軍曹であった。

村山軍曹は部隊全員が前に駆け出したので、つられて同行したが、八江中尉の担架が付いて来ていないことに気付き、一人で探しに来てくれたのである。村山軍曹は、騎兵隊以来の身近な部下であった。

中尉は軍曹に肩を貸してもらい一緒に歩き始めた。軍曹は安堵したのか次の退却方法を話し出した。

「我々は本体から逸れてしまった。この山中を行き敵兵に狙われるより、イラワジ本流に行き、舟を見つけ河を下る方が賢明です」と言った。

それから3日後、八江中尉と村山軍曹は一隻の丸木舟（両側に筏装着）を探し当て、イラワジ河の川中に出ると急流であるから、敵に狙撃される危険はあったが河岸に沿って下った。

雨期のイラワジ河の川幅は大変広く千メートルを超えていた。川底の地底の影響か、いたるところで舟が確実に巻き込まれる大きな渦が逆巻いていた。このまま行くと二、三日の内にバーモに着けそうだと安心してたおり、舟が敵に見つかってしまい、激しい射撃にあった。村山軍曹は、舟を、沖に出し急流にのせた。敵の射撃範囲から逃れたが、我々の船は流速に翻弄されながら流れて行き、舟は今までになく大きな渦巻きに吸い寄せられて、舟はぐるぐる強烈な牽引力で渦巻の中に引き込まれた。

このとき、八江中尉は、水中で偶然にも布のようなものを掴み、水中から押し上げられ、水面に顔を出すことができた。気が付くと、それは村山軍曹の衣服であり、二人は幸運にも岩のあるところに打ち上げられていた。また丸木舟がその岩の付近に流れ込んできた。誠に天の配布であると思った。二人は水をかい出し再び舟に乗ることができた。このようにして何とか危機を脱した。



撤退中の日本軍兵士

八江中尉は、ふっと手で軍帽を触った。しっかりと顎ひもをかけていたので、軍帽は無事であった。ほっとして軍帽を脱いで、軍帽に縫い付けられている袋の中の仏舎利を確かめてみると、袋ごと無くなっていた。夜、寝たおりも軍帽を脱いでいない。いつ無くしたのか、不疑義な気持ちになっていった。

「仏舎利が身代わりになって頂いたのではないか、そうとしか考えられない」と思

った。

中尉はこのとき、仏舎利の加護に感謝し、思わず手を合わせ祈ったと述懐している。その後は順調に河を下り、バーモに近づいてきたので、適当な地点で船からおりた。中尉の負傷箇所は無理を重ねていたが、杖さえあれば遠くまで歩けるようになっていた。二人は河畔の道をいくうち、その日の夕刻にバーモに近接する知り合いの村に到着した。懇意にしていた村長宅で食事に預かったのち、ぐっすり睡眠をとった。次の日の午後、舟で送られ、ようやくバーモに到着した。

● (3) メイミョウのウラテン氏父母宅を訪問

八江中尉はバーモ到着後、150 km後方の第33軍参謀長の山本少将と18師団(菊兵团)師団長の田中中将にミッチーナ守備隊の勇戦と顛末を報告している。このとき、ウラテン一行の捜索と救出を依頼し了解してもらっているが、その後、杳(よう)として一行の消息が分からなかった。中尉は、あのイラワジ河の逆巻く激流と歩行困難なジャングルを思い出すと、ウラテン一行の無事が心配でならなかった。

その後、中尉は負傷と再発したマラリアのため、メイミョウの病院に後送された。そこでウラテン氏との約束を果たすために、氏の両親が住む自宅を訪ねた。父ウ・バツチンは相当の高齢であり、病床にあったので、二人に妹達が父に代わられて応対された。



右から2人目、妹のド・アマさん

中尉はバーモへの撤退時にウラテン氏一行と別れなければならなかった事情を詳細に話し、氏の一行を守れなかったことを喪心から詫びた。二人の妹は涙を流されていたが、中尉の話がおわると…。ウラテン氏の姉の方が、「お話を承り、事情はよく

分かりました。私たちは先ず貴方に感謝しなければなりません。長い間本当にいろいろ御親切にして頂き有難うございます。父母に代わって厚く御礼を申し上げます」そっと涙を拭いた妹は「兄から幾度となく八江さんについての手紙を貰っています。仏舎利を差し上げるほど貴方を敬服し自身の子供のように思っていました。譬え死んでいても、本望と思う」と涙ながら話してくれた。

中尉が返ろうとすると、氏の妹が中尉の歩行を痛々しく思ったのか、馬車を準備し絨毯を一枚もってきて、「病院は、毛布も十分でないから、これを敷いて下さい」と差し出してくれた。

中尉は手を振る彼女らに送られてウラテン氏との約束を一つ果たしたので、ほっとして帰途についた。

八江中尉はモールメン（モーラミヤイン）で終戦を迎えるまでウラテン一行を捜索し続けた。しかし、何の手掛かりも得ることができなかった。中尉は終戦の日に丘の上にあるパゴダに拝観し、心から仏の御加護で九死に一生を得たこと及びウラテン一行の無事を祈った。そして、中尉は日本に帰還したら、いつか必ず、パゴダを建て、ウラテン知事への友情とビルマへの親愛の情を示す印にしたいと、密かに誓ったと自著に記述している。

8. 戦後に於けるウラテン氏と一家との邂逅

終戦後、八江正吾氏（元陸軍大尉）は「ビルマの豎琴」で有名なモーラミヤイン南方のムドン収容所に集められ、約10ヶ月間、鉄道補修やモーラミヤイン市街地清掃の苦役に従事し、約一年後の1946年（昭和21年）に無事、日本の土を踏むことができた。

帰国後もウラテン一家の消息が分からず大変に心配しながら無事を祈っていた。他方、あのビルマでの辛酸で激しい戦いを時には思い出し、戦いに斃れた戦友や日本兵などのことを心のなかで法要していた。

八江氏は生活の糧として1948年（昭和23年）4月、元々、長崎県立農学校の卒業生であったこともあり、平和産業として八江農芸会社（種苗）を地元の長崎県諫早市で立ち上げた。現在は八江農芸株式会社と社名変更している。

● （1）戦後ウラテン氏との親交

1958（昭和33年）晩春のある日、八江氏はウラテンの氏消息に関する朗報を受け取った。

戦後、ビルマは鎖国を続けており、一般人は入国を許されていなかった。八江社長はウラテン県知事と一家のことを一日として忘れたことはなかった。その内、昵懇の入江教授がビルマへ戦後賠償の一環としマンダレー大学で日本語を一年間教えるために派遣されることになった。そこで八江社長は教授にウラテン氏一家の消息を頼んだ。

教授はマンダレーでは手を尽くしたが分からなかったので、帰国前にラングーン（現ヤンゴン）でビルマの大蔵省の知人にウラテン氏のことを依頼すると、偶然にもウラテン氏は彼の知り合いであって、いまラングーンにいるとのことであった。早速ラングーン郊外のウラテン家を訪ね八江氏の手紙を渡すと、ウラテン氏は貴方の写真と手紙を見ると「ああ懐かしい、これは私の息子です」と言って、その感動を抑えることができない様子でした。御家族の方々も同様に感激に咽ぶ如き表情を表された。この光景をみて教授は胸が熱くなったと帰国後、八江氏に伝えている。

入江教授から渡されたウラテン氏の手紙を見た八江社長は、白髪が増えたウラテン氏の写真を見るにつけ感動の余り涙がとめどもなく頬を伝わった。直ぐに八江氏はウラテン氏へ返却の手紙を出した。



ウラテン家の人々・1965年頃

そうすると同年10月7日付けで（住所：ラングーン・ウイサラロード・724番地）、ウラテン氏より長文の手紙を八江氏が受け取った。要旨は次のとおりであった。

「私たちはナンタロウ河を渡ろうとしているとき、中国軍につかまり調べられたのち、米軍の司令部へ連れて行かれGHQに送られ取り調べを受けました。しかし、私は一人のビルマ国家主義者でありましたから、貴方方（日本軍）の下で私の国民に危

難がないように出来る限りのことを行ったという信念で、恐れることなく取り調べの間に全てを話しました。

私は日本軍に協力していたからブラックリストに乗っており賞金を懸けられていたが、バーモ県知事時代にカチン族を飢餓から救ったので、彼らが米軍のスチルウェル将軍に私のビルマにおける善政を訴えてくれたから、無罪放免になりました。…。

米軍は親切にしてくれましたが、独立を願う私を英軍からは厳しい扱いを受けました。息子のモンテモンエイは日本軍に味方してミッチーナで民間防衛隊の一員であったから、英軍に囚われ軍事裁判にかけられ5年の刑でインドに送られた。

当時、連合軍は未だ日本と交戦中であったので、私は連合軍からビルマ人のゲリラ隊を組織するように要請された。同意すれば高額で良い待遇を提示されたが、連合軍の一員である英軍が息子に体刑を科したこと及び日本との友情もあったので、即座にその要請を断りました。

1946年ビルマ民政府ができ、私はセボーから立候補して下院議員になりました。1948年にはアウンサン将軍の有力な努力によって我々は英国から独立することができました。

紙面の都合で省略しますが、ウラテン氏はこの手紙でアウンサン将軍が暗殺された理由、ウーヌ政権のこと、その後、国家が社会主義を取り入れた由縁、カレン国防衛連合のこと、また、K. M. T. S (国府軍=台湾の蒋介石軍) と中共軍との関係でKMTSと戦わざるを得なかったことなど、戦後のビルマの重要な出来事を端的に記述してあった。

※筆者(高松)注釈：この手紙のビルマ建国当時の記述は大変に貴重な歴史的価値のある内容であると思った。

その他、長女がラングーンのゼヤー商会に勤務していること。次女は医師に、四男は英国に留学しているなど、八江氏を安心させるために、ウラテン氏は子供たち夫々が大成していることを記述している。

末尾に、もし、私達(ウラテン氏)が、ビルマで、貴方のために、出来ることがありましたら、何なりと申し付け下さい。

私及び家族は、バーモやミッチーナで、あの激しい戦いの中で、私達にして下さったことに対して、大変に感謝しています。私達は、絶対に貴方の御恩は忘れません。…。私と妻は65歳になりましたが、二人とも大丈夫で元気です。私たちは、貴方や、御家族のもっと大きな写真が欲しいと思います。これをもって、私の手紙をおわります。

いとしの息子へ その父母から」

● (2) ウラテン氏からの仏像寄贈

その後、八江氏はウラテンさん及び彼の家族に手紙による親交を続けていた。八江氏はビルマに行く友人の白土氏達にウラテン家への手紙と贈り物を預けた。それらは1958年（昭和33年）12月30日に届けられた。八江氏の手紙に長崎で建立計画中のパゴダに祭る仏舎利と仏像を望んでいることも記述してあった。

ウラテン氏は八江氏の手紙で彼が事業に成功されたこと及びミッチーナで腰を負傷し体内にあった銃弾を無事摘出したことを知り、大変嬉しく思うなどと返信に記述すると共に八江氏への仏像及び仏舎利と手紙を白土氏に託した。



2000年前の仏像

この仏像は1937年、私（ウラテン）がタガウンから捧持してきたものです。タガウンは紀元前200年頃、アビ王によって建設されたビルマ最初の首都であり、私が1937年にそのタガウンを訪れたとき、僧侶の一人から頂いた仏像で、2000年以上前のアビ王時代の古いものです。戦争中はテンダウンギーパゴダの委員会に、ほかの貴重な仏像と一緒に預けていたものです。委員会は返却を大変に渋りましたが、ようやくそれを返してもらいましたので貴方に贈ります。

私は仏舎利と信じられる小さな一片と菩提樹の一片を、仏像の穴に入れ、蜜蝋で塞ぎ、貴方に会懲ります。

この仏像は普通の仏像ではなく、非常に尊いものです。つまり。宗教的儀式で長い間、僧侶の読経によって清められていたものですから、この事をよく承知下され、清なる場所でお祀り下さい」と記述してあった。

八江氏は1959年（昭和34年）4月27日にトング市のビルマ僧ウケミンダ僧正、日本の僧侶、白土氏、ビルマからの帰還者達、ビルマで戦死した人々の遺族達及び諫早

市の名士及び市民が参加し、市内の安勝寺で仏像及び仏舎利の贈呈法要の儀式を行っている。

● (3) その後の八江中尉

八江氏はその後、故郷の諫早市で各種の会長を引き受け地域社会への奉仕を続けながら、ウラテン氏一家との親交をはかり、日本とミャンマーとの交流にも努力していた。

氏は1964年（昭和39年）の「ビルマ戦績巡拝団」にも同行し、待ちに待っていた待望のウラテン一家とも再会している。



モンモンキ親子と八江氏の宮詣

その後、八江氏はウラテン氏の孫にあたるモンモンキ氏を日本に招聘し自社で研修に当たらせ、地元の東えり子さんとの仲介の労をとっている。

八江農芸株式会社の農園は諫早の街や有明海を眺望できる丘の上にある。近くの本明川の河口は正にイラワジ河を想起させる光景である。

八江社長はその丘上の農園から、ウラテン氏一家への感謝やビルマに思いを馳せながら、ビルマに向かって礼拝し続けていたのである。

9. おわりに

ドイツ（プロイセン）のカール・フィーリップ・ゴットリーブ・フォン・クラウゼヴィッツ（Carl Philipp Gottlieb von Clausewitz）は自著の「戦争論」のなかで戦争を次の通り定義付けている。

【戦争とは戦争目的を達成するために、敵を強制して我々の意志を遂行させるために用いられる暴力行為である】。

戦争を単純に捉えた場合、戦争の本質は暴力の行使であって、その目標は敵の戦闘力の粉砕にある。戦争の場合、ジュネーブ諸条約に違反しない限り、基本的には暴力を使用して敵側の人員を殺傷しても罪にはならない。

人間の生命も奪いさる凶悪事件であるから、人類は戦争を最も忌避し、それが発生しないように最大限の努力を尽くさなければならない。



ミャンマー人の誇り、黄金に輝くシュエダゴン・パゴダの夜景

しかし、このように戦争と言う人間の生命を合法的に奪い合う最悪の環境下にあっても、今から77年前にビルマ（ミャンマー）のミトキーナ（ミッチーナ）で人間性に基づき、死生を超えた清らかな二人の友情の実話があった。

旧日本陸軍で最強と言われた第18師団（菊兵团）第114連隊の八江正吾中尉とバーモ及びミッチーナの県知事でマンダレー王族のウラテン氏とその家族との友情と信義の交流を知るにつけ、これほど人間感情の真率さと爽やかな感動を受けた経験は稀であった。

日本の外交方針は国際協調主義に基づく「積極的平和主義」の立場から、平和と共存及び法の支配を旗印にしている。目下、我々はこの外交方針に基づき、ミャンマー鉄道支援を物心に渡って実施している。

その目的は次の通りである。

「我々はミャンマーと協力し国家の中核である重要なミャンマー鉄道の整備・拡充及び近代化など、鉄道を発展させミャンマー市民の生活向上とミャンマーの発展に貢献し、その結果、両国の共生が益々深度化し、それが我が国や我が国企業の益に結び付くことである。」

一般論として、各国間及び各個人間に於ける事業では自国及び個人の利益第一を優先するのが人情である。

しかし、これでは軋轢や問題が生じ、一方に大きく利益が傾き、双方の目的が達成できない場合が少なからず生じる。

1億円のBudgetで2億円のPrice商品を買うことはできない。しかし、双方がお互いに相手の立場にたって、1億円の予算で、世界最高の商品を生み出そうと、本気で努力すれば、その最高商品乃至その領域に近い商品を生み出すことが出来ると思う。ひょっとすると、その商品は2億円のグレードではないが、価値は2億円かもしれない。

所詮、国対国と言っても人間対人間である。今回紹介している八江中尉とウラテン県知事一家は、あの過酷で辛酸な戦場の中で、生命の危険性も伴う自己犠牲も厭わない「友情と信頼」の実話は、世間では、譬え青臭い理想論と言われても、我々が海外で活動する道標となるだけでなく、今後、我々一人一人の生きる指標になると思う次第である。

なお、十分な校正ができていないため、誤字脱字などがあると思われませんが、その節は御容赦を御願い致します。

2020年8月14日

(一社) 日本ミャンマー友好協会

高松重信

<参考及び引用文献>

八江正吾著『イラワジの誓い』 1-267 頁、昭和堂印刷、1967 年 10 月

野口省己著『回想ビルマ作戦』 1-314 頁、光人社、2000 年 1 月

川北恵造著『烈風』 1-314 頁、叢文社、1983 年 1 月

伊藤桂一著『かかる軍人あるき』 1-489 頁、光人社、1993 年 4 月

福永勝美著『ビルマの地獄戦』 1-298 頁、雄山閣出版、1984 年 6 月

緩詰修二著『最悪の戦場独立 小隊奮戦す』 1-253 頁、光人社、1993 年 5 月

筆者略歴

たかまつしげのぶ

高松重信



1942年生まれ。1967年国鉄入社、本社及び松任工場長、吹田工場長などを経て、民間会社の海外鉄道車両関係に従事。台湾に約5年6か月・電車の現地生産・責任者として駐在。

ミャンマーとの関係は1982年国鉄からビルマ国鉄へ派遣、いらい現在に至るまでミャンマー鉄道省運輸省及び同国鉄へ顧問的な指導。鉄道に関する論文発表多数。

元国土交通省ミャンマー鉄道改善WGのメンバー。2022年8月外務大臣表彰受賞。現(一社)日本ミャンマー友好協会(副会長)。現JICAミャンマー鉄道政策&技術顧問。

日緬ライブラリー・パダウ 3

嘗てのビルマ戦線で戦った日本将兵を想う

<その2>—ビルマ・ミートキーナ（ミッチーナ）の死生を超えた友情の誓い—

高松重信 著

2025年1月1日 発行

発行者：一般社団法人日本ミャンマー友好協会

〒160-0012

東京都新宿区南元町13-3-504 ライオンズマンション信濃町5F

TEL 03-6380-0409

ISBN 978-4-911475-02-7 C1810

©高松重信 2024